

---

# ジャパン

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャパン

### 【Zコード】

Z3952M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

ジャパン - - それは誰もが焦がれる遙か東方の国。その全ては黄金で出来ているという。西方の人々は幾度もジャパンを目指し、そしてその途中にはびこる『獸族』と『魔族』に行く手を阻まれまだ誰もその地を目にした者はいない。今、2人の青年が西方からジャパンを目指して旅を始めた - - 海斗初の異世界ファンタジーです。

## 1・遙かなる草原の大地（前書き）

謎が謎を呼ぶ（できるだけ（—￥））短編で続く小説にしたいです。  
これらも「蔵出し」物です。

## 1・遙かなる草原の大地

その草原には青く澄んだ風が吹き渡り、地に映える緑を大きく揺らしていた。

『ねえ、ルー。本当に旅に出ていいの?』

『いいさ、お前ももう一つだし約束の騎士の称号も得たんだろ。』

『うん! ルーも一緒によね。ずっと城の暮らしでルーともあまり会えなかつたんだもん。』

『一緒に、義経。さあ、旅に出よう。』

そこでの遊牧民たちは羊の乳で作った『ヨーク』といつスープに口の実を混ぜ、特別な日には羊の肉を食べる。

遊牧民であるため、一定の地に留まる事はない。移動するときは、数30頭もある羊を率いて約半年はその場から離れる。

その移動の時期は、一族の長老 マヤイ・ラタに任せていた。術師である。

星の位置や風の向きから他の地へ移動する日を決める。

「あと3回月が巡つたらこの地を後にしよう。」

一族の長 ロト・キタイはその夜長老のテントでそう告げられた。

「やはり・・・・・・獣族が近づいているのですか? 長老。」

「その通りじゃ・・・我らには日の長いちはこの地で生活し、その代り獣族がこの地に冬を越すため来る時には、この場を獣族に渡さねばならぬ。」

それが、この遊牧民の『捉』であった。

獣族と『共生』するための。

『冬に備えての備蓄はもう出来てるのだろう? ロト・キタイ。』

『ガヤ』と呼ばれる獣族の皮で作ったテントの中には、2人以外誰もいない。ただ、小さなたき火の炎が2人の間にあるだけだった。

「日がもうない。皆に知りせぬよつと。」

「判りました。」

口トも空腹の為に死した獣族の皮で作ったコートを身にまとつて  
いる。

彼は長老 マヤイ・ラタに挨拶をしテントを出た。

空は満点の星空。

昼は羊<sup>マヤ</sup>の放牧に男たちは総出で行い、女性は背後の山の奥にある  
水を汲み、口<sup>コ</sup>の実を取るところ生活がもう数千年続いていた。

伝説はもう一つあつた。

そここの民はいつか獣族も魔族もない『約束の地』（カナン）へ  
と辿りつくことである。誰も『伝承』でしか聞いた事はない。  
口トは自分のテントに戻ると深夜にも関わらず、娘のマリナ・キ  
タイ、そして弟のシド・キタイが待っていた。

「長老の所に行つっていたの？父さん。」「

「ああ。」

口トは頷き、羊<sup>マヤ</sup>の乳に口<sup>コ</sup>の実から取れた甘い汁を入れ、  
乳に渡した。

「もうすぐこの地を離れるの？また、あの寒い北へ移動するの？  
6歳の弟のシド・キタイが身を乗り出して言った。「僕、ここの方  
がいい。」

「駄目だよ、シド。獣族と魔族がそろそろこの地に近づいている  
という長老のお告げだ - - 従うしかない。」

そして、一口羊<sup>マヤ</sup>のミルクを飲む。

温かかった。

確かに季節は冬へと移動している。

月の位置と星の位置が冬の配置になつてている。

「そう・・・・・」口<sup>コ</sup>が『約束の地』（カナン）なら良かつ  
たのにはね。」「

「大丈夫、いつか見つかるさ。」

14歳のマリナに口トは父の微笑みを浮かべた。「この地を見つ

けただけでも私たち遊牧民にとつては貴重なものだ。獣族や魔族がこの地からいなくなれば、また春になれば、ここに戻つて来れるさ。

「

「そうね。

マリナも羊マヤのミルクを飲んだ。

「ところで

と、テントには必ずある小さなたき火の向こういひで、ロトは、「あ

の2人の客人はどうした?」

「隣にテントを用意したわ。」

マリナは微笑んで言つた。「山に水を汲みに行くのは女性の勤め

その途中で会つてしまつた獣族を倒してくれたんだもの。ミヤギは今妊娠してゐるから余計その『血』の臭いが獣族を呼んだんだと、義経は言つていたわ。」

「そうか - - -とにかく、それは良かつた。ミヤギを水汲みの使いに出した私も悪いが、こつも早く獣族が近づいていとは思わなかつた。」

「義経とルシフェルつて西方から來たんだつて。」

ロトが身を乗り出して得意氣に言つた。「なんか・・・・・・『騎士』とかいう称号を持つていて、『ウイリアム帝王』とかいう人にも仕えたすごい人だつて、ルーが言つてたよ。」

「ロト、ちゃんと『ルシフェル』と言いなさい!」

マリナは弟をしかつた。「『ルー』は義経が呼ぶ時の愛称よ。私たちはちゃんと『ルシフェル』つて言わなければいけないのよ。」

「はーい。」

ロトは頭をかいた。

「さて、夜も遅いし今夜はもう休んだ方がいい。」

父がそう言つうと、ロトは、

「そうそう、父さん!明日ね、義経が馬ホースとか言う動物に乗せてくれるんだって。あの2人が西方から連れて來たラマよりも大きな動

物だよ！」

はしゃいた。

姉のマコナは弟の頭をこづき、「あなた羊を先導するマリにも乗  
ヤマ

お姉ちゃんは怒っては、か

「いつかは」の遊牧民の娘になるんだから。こつまでも離はつかおつてないの。」

「せりば、怒る。」

「さあ、2人共早く寝なさい。明日からは『移動』の用意だ。あと3回しか月は私たちに 対して時間をくれないのだから。」

「はい。」

2人は返事をし、父がたき火の炎を消すのと同時に羊の毛で作つた布団の中にもぐりこんだ。

「ねえ、お姉ちゃん。」

「ロトが囁く。『ルシフールつて『じょじし（叙事詩）』を書いてるんだって。『じょじし（叙事詩）』って何？」

「旅の途中であつた事を詩にしてあらわす事よ。」

「そ、う、なん、だ。」

マヤの隣で眠気を催したロトの目が細くなる。「その叙事詩つて  
いうのも聞きたいな。西方の話も聞きたいし、ジャパンの話もいつ  
ぱい聞きたい。」

「だったら、早く寝る事ね。」

七

彼女も眠気に待てなかつたらしく、また、父が帰つて来たのにほつとしたのかあつという間に深い眠りに就いていつた。

## 1・遙かなる草原の大地（後書き）

はい、新連載スタートです。4部完結の予定です。

## 2・義経＆ルシフェル（前書き）

黄金の都『ジャパン』を目指す義経とルシフェルは緑の大地と生活を共にする遊牧民の元に『客人』として招かれた。西方からの旅の疲れを癒すほんの一時であつたが - - -

## 2・義経＆ルシフェル

早朝の風は彼らにとつて清清しいものだった。遙か西方からの旅、もつ何か用地に足を降ろした生活をしていかつただろう。

### ターッ

義経のラマを驅る声が草原に響き渡る。

と、同時に前方で戯れてそれぞれの方向を向いていた羊ヤが一斉に同じ方向を向く。それは、義経がラマを追い集めた為。一つの集団と化した

羊ヤは義経のラマに追われる様にして前方へと走つて行つた。

「すごいや、義経！」

シド・キタイが目を光らせて隣の長い黒髪のルシフェルに感動を伝える。

「だつて、たつた先刻の事だよ。お姉ちゃんがお手本見せたの。」

「そうだね。」

黒い服に身を包んだ長身のルシフェルは少年を見降ろし、「私たちの

国にも『羊追い』はあつたからね。もつとも他の国では、人や馬ホースじゃなくて犬に追わせる所もあるよ。」

「そなんだ。」

「だから、義経は簡単にラマを操れるのね。」

シドの姉、マリナ・キタイは父一族の長に代わつて幼小の頃から『羊追いヤ』をしてきた。10の頃には既に一族一番の『羊追いヤ』人として男性のそれからも一目置かれていた。

「義経は飲み込みが早い。」

ルシフェルは言った。「子供の頃からそだよ。」

「へー、そんなに長い付き合いなんだ、ルーと義経つて。」

「いらっしゃい。」

マリナは弟の頭を小突いた。「『客人』に向かつて何て言い方するのよ。

言つたでしょ、『ルシフェル』って呼びなさいつて。

「別に気にしていないよ。」

彼は微笑して言った。そこへ、裏山の奥にある泉から水を汲んで来た

10名程の女性たちが帰つてきた。

「あら。」

その中の一人がルシフェルに気付き、頭を下げた。「お客人様。」

「もういいのかい? 体の方は。」

「ええ、すっかり。ルシフェル様が煎じてくれたお薬のおかげで良くなれましたわ。」

彼女は彼らを『客人』として招く事になつた女性だつた。

たまたま、その近くを通つた時。

「ルー。『血』の臭いがする。」

昨日の朝の出来事である。義経は馬の歩みを止め、前方にその碧色の瞳を向けた。「あの泉の方だ。」

それがこの遊牧民との出会いだつた。

女性は木組み樽を置いて、静かにお腹を触つた。

「ルシフェル様。この子はあと30回月が昇つたら生まれると長

老は

おっしゃいました。

「こりと微笑む。「この子の名付け親になつて下さいませ。男の子

だつたら義経様の様に雄々しく、女の子でしたらルシフェル様の様に

思慮深く、知識豊富な子に。」

「考えとくよ。」

ルシフェルは答えた。

「おい、ルー！」

遠くで義経の声がした。「お前もそんなトコで油売つてないで、『羊追い』<sup>マヤ</sup>か”口の実”集めでも手伝つたらどうなんだ？」

お邪魔してんのだぞ！」

「生憎。」

ルシフェルは笑顔で、「私は詩人……」での出来事を全て物の書に残す事に専念するよ。」

「……………ったく！」

義経が舌を打つのを遠くの義経たちも判つた。

「義経！」

マリナは叫んだ。「女たちの水汲みも終わつたからもうすぐ朝食よ。『追い』が終わつたら帰つて来てね！」

「判つた！ 東の原で放牧したらすぐに戻るよー！」

ターッ

掛け声と共に義経はラマを一層早く走らせた。

朝食の時も好奇心旺盛な少年は義経やルシフェルを質問攻めにした。

「へー！ 剣？ どう使うの？」

「これ？」

青い騎士の服を着た義経は腰に手をやり、「闘いの時とか、動物を狩る時とか。」

「闘い？ なんで喧嘩するの？」

「今では形式的なものだよ。」

義経に代わつてルシフェルが答えた。「昔は自分の土地を奪いに

来た

敵を倒すために使っていたんだけど、今はウイリアム王やその他、  
国々

に王がいて争い事は話し合いで済む・・・ただ、その時の名残として『騎士』

の称号を得て王に仕える為に剣で闘いを相手に挑むだけ。』

「王さまってそんな偉いの？僕たちの長老より？」

「もう！シド、いい加減にしなさい！」

『羊のミルクに』『ココの実』を沢山入れた朝食を取りながら、

『義経もルシフェルも食事が出来ないでしょ。』

「ねえ、マリナ。これマリナが作ったの？」

義経はそれがとても気に入つたらしく、マリナが勧める通り「おかわり」

をしたばかりである。「美味しい！俺がいた国の『ピーグル』に似てる。」

「ええ。」

マリナは頷き、「羊の乳を少し発酵させて粘りを付けた中に”ココの実”を入れるの。どちらも私たちの大切なタンパク源よ。その代り、羊は長老の許可が出た特別な口しか食べられないの。」「ふーん。」

義経は口を丸くし、それでも食べることをやめない。

「この子はこの食事でちょっと里心が出たらしい。」

そう言い添えるルシフェルに彼は、

「お前だって『おかわり』しただろ、人の事言えるか。」  
むすっと、膨れた。

「でも、どうして『ジャパン』なんかに。」

マリナは尋ねた。「私たちにも『ジャパン』は判るわ。遙か東方にある

黄金出出來た幻の王国・・・そこには『獸族』も『魔族』もいない。

「

「うん。」

木の茶碗を置き、義経が頷く。

「でも、そこへ辿りつくまでには『獣族』と『魔族』が大勢いる  
行つて帰つて来た人なんていんじやないの？」

「じゃ、どうして『ジャパン』の伝説はあるのかな？」

ルシフェルは意味深な微笑を浮かべた。

「なんか俺さ」

義経は、「子供の頃からルシフェルに『ジャパン』の話を聞いて  
いた

せいいか - - 何か懐かしいんだよね。それで、ルシフェルが『騎士ナイト』  
の称号を得て俺たちの王 ウィリアム王の許可が出たら一緒に連れ  
て行つて

くれるつてずっと昔からの約束だつたんだ。」「

「そうなの・・・・・・・・

マリナは、右手の小指を軽く噛んだ。「やっぱり、遊牧民の  
生活じや物足りないのかしら。」「

こちらも意味深な答え。

「別に嫌いじやないよ、」「」。

義経は慌てて首を振った。「広い草原に何処までも青い空。ラマで  
羊を追う生活 - - 俺の国と同じだよ。もっとも俺は15の時には  
もう城に入つていたからそんな『自由』な生活はなかつたけど。」「

「『城』つて何?」

シドが尋ねる。

「石を組み立てた大きな家だよ。」

少年のあどけない質問にルシフェルは優しく答えた。「西方では  
ほとんど

そういう建物には人は住んでいる。また、そういう街づくりが敵の侵  
入を防いで  
くれる - - 獣族や魔族のね。」

「そ、うなんだ・・・・・・・・

シドは少し寂しげな表情を浮かべた。『僕たちにも大きな『城』があつたら

ずっとこの地に住んでいられるの!』。

「運命よ、シド。」

マリナは答えた。『誰もが皆、満足な生活を送つてゐる訳じゃない。だけど

どこか工夫して、『今』を平和に楽しく生きる方法を見つけて行く

シドももう少し大人にならなくちゃね。『ラマ使い』がちやんと出来て、

いつかはお父さんの跡を継いでこの一族の長となるんだから。』

「そうだね!」

シドは強く頷いた。

太陽はもう空高く上がつていた。東の原に移した羊たちを  
そろそろ水辺に移す頃である。

「教えてあげて、義経、シドにラマの扱い方を。」

「いいよ。」

「あなたたちの馬の世話は私がやつとくから。」

と、その時、一族の長 ロト・キタイがラマを駆つて東から戻つて來た。

「マリナ、移動の準備は出來てるか?」

降りるなり、彼女にそう尋ねる。

『もう冬の食事・・・半年分は準備してある。冬になると羊の乳の出が悪くなるし、北の血では、『ココの実』も取れない。今年は出産率が

いいから、長老の許可をもらつて羊の肉を食糧とするしかないわね。』

「そ、うか。」

一族の長 マリナの父 ロト・キタイは暫く思案し、それからふいに、

義経とルシフェルに視線を移した。

「『お客人』」

穏やかな口調だった。「長老が貴方がたに会いたいを言つてゐる。今晚長老のガヤ（テント）に来てくれないか？」

「いいですよ。」

義経は快く承諾した。「俺たちも長老に挨拶しなくていいじゃない。」

「そう言えば、まだ長老に会つてなかつたわね、義経もルシフェルも。」

マリナが言つた。

「長老つて・・・・・・」

ふと、思いついたように義経が、「おばあちゃん？」

「あまり期待しない方がいいわよ。義経がナンパするタイプじゃないって

事は私たち百も承知だから。」

「『そして義経は”おばあちゃん”と昔話をすることになった』」

「余計な事書かんでいい、ルシフェル！」

義経は自分より少し背の高いルシフェルの肘を小突いた。

## 2・義経&ルシフュル（後書き）

作者、遊んでます。不定期更新です（￣▽￣）。。。。

### 3・伝説（前書き）

遊牧民のもとを訪れる事になつた義経とルシフェルは、長老からその遊牧の民の『伝説』を聞く。一方、翌日にはこの地をたつと知ったシドはルシフェルに西方の話をききたいとねだる。

### 3・伝説

「お客人、よく我が一族の者を獸族から救ってくれた。」

薄暗いガヤの中で、深夜、義経とルシフェルは長老の元を訪れていた。

「偶然です。」

義経が答えた。「こちらこそ、お世話をなつてしまつて申し訳ありません。」

「いや、気にする事はない。」

長老は茶色い布を頭までかぶり、顔が良く見えない。

彼らの中心にあるたき火の灯りだけのせいか、それとも自らその姿を隠しているのか・・・・

「この遊牧の民に客人は珍しい・・・そなたたち西方から來たと申したな。」

「はい、ウイリアム王に仕えています。」

「あの西方一帯を治める帝国にか。」

長老はその王の名を知っているようだつた。

「ご存知なんですか？」

義経は少し驚いて尋ねた。ここはもう西方から遠く離れた地。  
「風の噂にだよ。」

しづがれた声で長老は答えた。「歳をとると色々な物を見たり聞いたりしてきてる。かの王の名もその風の便りに聞いた事があるのだよ。」

「ところで」

義経の隣のルシフェルが、「どうしてあの険しい山へ女性が水汲みに行くのですか？」  
「田を細めて尋ねた。」

「この遊牧の民の伝説じやよ。」

薪をくべる長老。「その昔、この遊牧の民は500を超える民であつた。ところがある日、獣族に襲われ大勢の者が命を落とし、大勢の民が傷を負つた。」

「・・・・・」

「そこへ、一人の女性が山の神から『私の水を飲ませなさい。傷は驚くほど速く癒えるであろう』というお告げがあった。そこで傷の一一番軽い女性が山へ行き、お告げ通り何度も足を運んでは水を飲ませしているうちに、傷を負つた者たちは命を取り戻したのだよ。」

「伝説ですね。」

義経は素直に、「それを今も守つてゐるんだ。」

「そうじやよ。」

長老は義経に視線を戻しその碧色の瞳をじっと見つめ、「我々がこの地にいる時は獣族は北へ。そして幾月か廻つたら獣族がこの地へ戻る。この地をその時は我々は北へ移らねばならぬ。」

「それが獣族との共存の道ですか。」

ルシフェルが問いかける。

「そうじや。」

長老は答えた。「もうすぐその月が訪れる……旅人よ。」

「はい。」

「そなたたちも早くこの地を離れる事だな。獣族、魔族、人とは相容れぬもの故。」

「明日にもこの地を立ちます。」

義経は答えた。

たき火の向こうの長老をじつと見つめ、「俺たちには『ジャパン』へ行くという使命がありますから。」

「『ジャパン』へ行つてどうする、お客人。」

長老が問いかける。「あの地に足を踏み入れた者は誰もおらぬ。西方やこの地と同じく獣族、魔族、人が相争つてはいると聞くぞ。」

「『ジャパン』をご存じで?」

「風の噂じやよ。」

長老はそこで大きく息を吸い、「私も年老いた。かつては『ジャパン』に行きたいという夢があった。」

「・・・・・」

「しかし、今はこれで十分なのだよ、義経殿。」

そのしわがれた声だけが『表情』を読み取る事ができる。「約束の地<sup>カナン</sup>を目指して我らはこの広い草原を旅している。もしかしたらそなたたちの約束の地<sup>カナン</sup>は『ジャパン』かも知れぬな。」

そして、最後に一言。「早くこの地を離れよ、義経殿。」か弱く燃えるたき火の向こうで、長老はそう告げた。

「帰ってきたよ！お姉ちゃん！」

ガヤのテントの前で、ロト・キタイが待ちわびたかのように松明を振り回す。

「ただいま。」

義経はシドの頭を撫でて、「まだ、寝てなかつたのか？」

「うん！」

少年は力強く月明かりの下、頷き、「だつてルシフェルから西方の話聞く約束だもん。」

「シド！いい加減にしなさい！」

姉のマリナ・キタイはきつい口調で、「2人はもう疲れてるのよ、いつまでも駄々をこねないの！」

「だつてー！」

「いいよ、私たちは明日にはこの地を後にしなければならないのだから。」

ルシフェルが夜風に髪を靡かせ答える。

「え、明日？」

マリナは驚いた様子で、「だつてまだ・・・・・・」

「獣族が近づいて、君たちも移動するんだろう？」

義経はマリナを見つめ、「俺たちもそろそろ旅に出なくちゃ。」

「・・・・・そう。」

「義経、ラマの使い方教えてくれるって言ったのに。」

「明日の朝、早起きしよう。それでいい?」

「うん!」

義経の優しい声にシドは頷き、「でも、今夜で最期なら、ルー、お話してね。」

「いいよ。」

ルシフェルは心強く頷いた。

マリナたちのガヤの中で。

「アーサー王の話をしよう。」

ルシフェルは笑みを浮かべ、優しく言った。「ウーゼル王が亡くなり、後継者がいなかつたために争いが起こったが、ある時、カンタベリー寺院に、剣が刺さっている不思議な石が現れる。その剣には、『この石から剣を抜いた者は全イングランドの王である』と書かれていて、イングランド中の王や領主や騎士たちが剣を抜こうとするが、誰にも抜くことができなかつた。その頃、15歳のアーサーは兄ケイ卿の従者として騎士見習いをしていたが、馬上試合で剣を持つて来るのを忘れた兄のために宿へ戻る途中、その「石に刺さつた剣」を見つけ、何気なくその剣を抜いたんだ。魔女マーリンはアーサーの父親がウーゼル王であることを明らかにする。こうして、アーサーは即位したけど、即位に反対する王や諸侯との内戦が始まつたんだ。反対勢力の中心であつたのは、オークニーとロージアンの王、ロットだが、彼の妃モルゴースはアーサーの異父姉でもあつたんだ。戦は長く続いたが、アーサーはマーリンの助言とベンウイックのバン王たちの協力を得て勝利を收める。その後も、内外の戦乱を数多く勝ち抜き、特にブリテン島にとつて脅威であったアングロ・サクソン人を壊滅的にうち破つてからは、平和な一時代を築きあげたんだ。彼の王国は『ログレス』、都は『キャメロット』と呼ばれたと言われている。」

そこでルシフェルは一呼吸置き、

「眠くないかい？明日は早起きだぞ。」

シドに尋ねると、

「大丈夫！1晩くらい寝なくたつて平氣だよ。」

「今、ラマのミルク作るわね、義経、ルシフェル。マリナがそう言つと、

「ありがとう、マリナ。」

義経は微笑んだ。「俺、それ凄く気にいつているんだ。」

「そう！」

嬉しげにマリナが答える。

天空には満月。

ルシフェルの『問わず語り』は続く-----

「ある時、剣を折ったアーサーは、マーリンに導かれ、ある湖を訪れたんだ。不思議なことにその湖面から、白い衣をまとった女性の腕が突き出ていて、そしてその腕はひとつふりの剣を握っていた。その剣はエクスカリバー。アーサーはエクスカリバーを湖の貴婦人から譲り受け、生涯その身に帯びることになるんだ。また、エクスカリバーの鞘は、身につけている限り、どんな傷を負つても一滴の血も流れないと魔力を持つていたらしい。」

そこで、シドは、

「ねえ、そのマーリンとか言つ人、魔族なの？」

「さてね。」

ルシフェルは髪をかき上げ、「伝説だからね。」

「続きは？ルー！」

「いらっしゃんと『ルシフェル』って呼ぶの！」

マリナの怒る声が飛ぶ。

義経は笑つた。

「最後の話だよ、シド。」

ルシフェルはラマのミルクを受け取りながら、「これを見いたら寝るんだよ。」

「うん！」

シドは元気に答えた。  
よっぽどこの手の話が好きらしい。

それとも、見たこともない世界に興味を持つ年頃なのか。

「アーサー王とモードレッド両軍の最初の戦で、ガウェインが命を落とす。ガウェインは死の床で、ランスロットに謝罪と、王への助力を願う手紙を書いたんだ。アーサーとモードレッドの戦が続く中、ある時、アーサーがまどろんでいると、その夢の中に死んだはずのガウェインが現れ、『和睦を申し入れて戦を中断し、ランスロットの援軍を待つように』と告げたんだ。しかしその和睦は成功せず、最後の激しい戦いが始まってしまう。両軍の死骸が累々と横たわる中で、アーサーはモードレッドを殺すけど、モードレッドが振り下ろした剣で瀕死の重傷を負うんだ。アーサー王は自分の傷の重さを知り、側近のペディヴィアにエクスカリバーを湖に投げ入れるように頼んだ。湖に剣が投げ込まれると、水中から腕が現れて剣を受け止め、三度振つてから、再び、剣と共に水中へ沈んだ。アーサーはペディヴィアとともに水辺に降りていくと、そこに一艘の舟があり、その中には3人の貴婦人がいたんだ。その貴婦人のひとりは、アーサー王の姉モーガンで、アーサーの頭を自分の膝へ乗せながら『弟よ、どうしてなかなか私の所へ来なかつたのですか？頭の傷がすっかり冷えてしまっています』と嘆く。アーサーは、ペディヴィアに『私はアヴァロンへ傷を癒しに行く』と言い残し、アーサーを乗せた舟は湖の彼方へ去つていき、やがて見えなくなつたんだ。』

「何処へ行つたの？そのアーサー王は。」

シドが尋ねる。

「さあね、それは私には判らないよ。私はしがない詩人だからね。

「ルシフェルがたき火の向こうで答える。

「それで最後？」

「ちょっとだけエピローグがあるけどね……アーサーが去ったのち、グウェイネヴィアは尼僧となり、そのことを知ったランスロットも俗世を捨てて神に仕える生活を送つたんだ。アーサー王が本当に死んだのか、あるいはアヴァロンへ旅立つたのかは誰にも解らないが、グラストンベリ修道院に遺されていたというアーサーの墓にはこう刻まれていたと言われていたというよ。

『ここに、過去の王にして未来の王アーサーは眠る。』

「ふーん。」

「不思議な話ね。」

シドと同じく、マリナもいつの間にかルシフェルの物語に夢中になつてしまつたらしい。

「きっと旅に出たのよ。」

彼女は言つた。「それほど偉大な王がそう簡単に死ぬわけないわ。

「そうだよ、俺たちの民だってあの伝説の通り、裏の山の水で皆傷を癒したんだから。」

「あの長老の言つていた、伝説だね。」

義経は言つた。

「そうよ。」

マリナは笑つて言つた。「だから、あの山へ水を汲みに行くのは昔からその女性の勇気を称えて女性なんだから。」

「そうだね。」

義経は答えた。「さあ。明日に備えて、皆寝よう。」

「それがいい。」

ルシフェルも同意する。「隣のガヤへ帰るよ、シド、マリナ。」

「おやすみなさい！」

「おやすみーー！」

何故か。

今夜は、父 ロト・キタイの姿がこのガヤにはない。  
少し疑問に思つた義経だが - - -

2人はキタイ家族のガヤを後にしようと立ちあがつた。  
ガヤから出る間際、

「何かあつたら、私たちを呼びなさい。」

意味有り気に - - - 紅の瞳を肩越しにシドとマリナへ向けルシフェルは言った。

深夜。

満月が天空を支配する時。

義経がふいに、目を覚ました。

「! · · · · · · ·

良く澄んだ、闇の中でも煌めく碧眼で周囲を見回す。

『普通』のものなら気付かないであろう - - -

その『香』の臭いに。

「ルシフェル！」

素早く剣を取り、傍らの友人に声をかける。  
が、既にルシフェルは彼らのガヤの入り口に立っていた。

「判つたのか？ルー。」

立ち上がり、彼に寄り添う。「俺だけかと思つた。」

「判るさ。」

ルシフェルは微笑し、義経を返り見た。「これは『獣寄せ』の『

香』だ。」

「ああ··· ··· ··· ··· ···

義経は頷いた。「あの長老、明日にも獣族が来るとか言つていた

の、

何で逆に『獣寄せ』の『香』を使うんだ - - - 魔族に襲われた人たちが

『獣寄せ』の『香』を使って『互い打ち』させることで使う事はあるけど。」

「じうやう、それが目的ではないんだよ、義経。」

ルシフェルは闇に目を細めた。

満月が、眩しい - - -

「あの伝説。」

ルシフェルは言った。「まんざら驟でもなさそうだ。何か裏がある。」

「ルーはマリナたちを守つて - - -」

彼の言葉を聞き終える前に、義経は長老のガヤ目指して暗い草原を走っていた。

「長老がおかしい、俺、見てくる - - -」

軽く地を蹴ると、義経は天空高く飛び上がった。

「気を付ける、義経。」

ルシフェルが声をかける。「ただ者じゃないぞ、あいつ。」「苦々しい口調だった。

### 3・伝説（後書き）

忘れていたわけではありません・・・・・・（――  
また、「次話投稿」になってしまった（爆死）

#### 4・最終話／約束の地（カナン） 前半（前書き）

遊牧の民のもとで暫しの休息をとっていた義経ヒルシフヒル。「間もなく獣族がこの地へ来る」という長老の言葉とこの民の間にある『伝説』。そこには、民の隠された『事実』があった。

『ジャパン』最終話 前半です。

#### 4・最終話／約束の地（カナン） 前半

その闇には獸族特有の碧色の瞳が無数煌めいていた。

「そこを、どけ！」

義経は地を蹴り、天空高く舞い上がった。腰に鞘から取り出した剣を頭上に掲げる。

ウォーン

その剣に反応したかの様に、地上の獸族たちは義経の後を追い、同じく地を蹴つた。

剣の刃を逆にし、彼は次々と獸族たちを地上へと落としていった。

「この地へ獸族が来るには早すぎる。」

義経は咳き、目を細めた。

その視界に。

見慣れた男性の姿があつた。

この遊牧の民を率いる一族の長 ロト・キタイであつた。

「何！？」

義経は彼の攻撃を身を翻してかわし、再びロト・キタイの姿を追つた。確かにマリナ・キタイとシド・キタイの父 ロト・キタイである。しかし、その容貌は獸族そのもの・・・・・・

「一体、どうなってるんだ。」

義経は咳き、長老のガヤへと向かつた。「この民は・・・・・・

」

その頃、ルシフェルはマリナとシドがいるはずのガヤへと入つた。

松明の小さな灯が一つ。

「マリナ・キタイ、シド・キタイ。」

ガヤの薄暗闇の中でルシフェルは静かに声をかけた。

「ルー？」

シドの微かな声が聞こえた。

「いるのかい？シド。」

ルシフェルはその方向へと足を進めた。そのガヤにも長老がたいた『獣族寄せ』の『香』が満ちていた。

彼は目を細めた。

その先には一対の碧色の瞳。

「どうしたんだい、マリナ・キタイ。」

彼がそう問い合わせると、

「急に」

マリナは語り始めた。「皆が暴れ始めたの。この変な香りをかいだから - - - お父さんもよ。」

その瞳は碧。

「そう。」

ルシフェルは頷き、ガヤの奥で抱き合つ2人に手を差し伸べた。

「こっちへおいで。もう怖くはないから。」

外では激しい獣族の雄叫びが聞こえる。

「おいで。」

ルシフェルは重ねて言った。

「ルシフェル・・・・・・。」

シドを抱いたマリナは静かに黒い服を身にまとつた彼の元へと歩み寄つた。

が、

ウォーン

ふいに、2人はルシフェルに向かつて牙を向け飛びかかつていった。

彼方に獣族の雄叫びを聴きながら、義経は長老のガヤへと入つた。空には満月 - - - その隙間から忍び込む月明かりだけがガヤ内で

の灯だった。

人影も松明もない。

「・・・・・」

義経は剣を構え直すと、奥へと入つて行つた。足下の草が微かな音を立てる。

「待つていたよ。」

暗闇の奥から声がした。

長老のものである。

そのガヤも強い『獸寄せ』の『香』に満ちていた。

「待つっていたよ、獸王。」

しわがれた声の持ち主は確かに長老のもの。

「どうしてこんな事をした。」

碧色の目を細めて義経は暗闇に向かつて問いかけた。「この民を

獸族にしたのは、お前だな。」

「仕方のない事だつたのだよ。」

長老は答えた。「民を守るのが私のつとめ……そのためにはどうしても仕方なかつた。より濃い血を求めるために、お前たちを呼び寄せたのも。」

そして、違う口調が後に続く。「早くこの地を去るがいい、旅人よ。」

「・・・・・お前は」

そう呴いた時、義経の目の前で強い閃光が放たれた。

「！・・・・・！」

義経は両目を押さえ、地に両膝を付いた。

「獸玉・・・・・・！」

一言呴き、地に伏せる。

「そう獸玉だよ。獸族を追い払う時に使う光の玉さ。」

今は光に満ちたガヤの奥で、長老が告げた。

「だからお前は来るべきではなかつたのだよ。」

「だから、お前を呼んだのさ、獸王。」

一つの声が入り混じる。

「獣王なんか」

掠れる声で義経は言った。「獣王なんか俺は知らない。」

「お前が知らなくとも、その血が知っているのさ。」

皺がれた声だけが、ガヤに響く。

そして、その光の中、もう一つの煌めきが義経の頭上に長老によつて翳された。

剣。

その刹那。

『風』がガヤに舞い込んだ。

「渡さないよ、この子は。」

義経に翳された剣を片手で受け止め、『風』は言った。「この子は私のものだよ。」

紅の瞳。

ルシフェルだった。

カシャン・・・・・・

片手で剣を彼方へ投げ飛ばし、ルシフェルは長老と義経との間に立つた。

「・・・・・お前は」

茶色いゴートを頭まで纏つた長老が微かな驚きの声で、「魔王 -

瞬間。

ルシフェルは長老のゴートを脱ぎ取った。

バツ・・・・・

「見ないで!」

「助けて!」

絡みあつて一つの声。茶色のポートの下には何もなかつた。

「・・・・・セツ言つ事。」

ルシフェルが呟く。

獣玉の光は次第に闇におさまつていった。

「ルシフェル？」

ややあって、足下の義経が彼に声をかけた。

「目をやられたようだね。」

ルシフェルが片膝をつき、「大丈夫かい？」  
静かに尋ねた。

「大丈夫。」

義経は目をこすりながら、立ち上がり、

「ルシフェル。お前ももう判つただろ？。」

「ああ。」

2人は立ちあがつた。

この民全員にまかれた『獣寄せ』の『香』と、間もなく獣族がこの地に訪れるという長老の言葉。

それらが、彼らの中で一つに繋がつた。

真実は『ポートの下に』『なにも無い』長老の姿。

「行こう、ルー。」

義経は言った。「マリナたちが言つていたあの山へ。」

そこには『伝説』の謎を解く何かがある。

月は  
- - - 妖しい光を放つていた。

#### 4・最終話／約束の地（カナン） 前半（後書き）

・・・・・スランプです。後半は何とか今月中に（滝汗）

## 5・最終話／約束の地（カナン）後半（前書き）

そして今、遊牧の民の『伝説』が明らかとなる。

## 5・最終話／約束の地（カナン）後半

白い谷と緑の森をぬけると、その湖はあった。何処までも透明で、  
静かな場所。

「ルー。」

義経はそこで歩みを止め、傍らのルシフェルに声をかけた。「こ  
こだな。あの伝説の湖は。」

「その様だね。」

ルシフェルは涼しげな声で答えた。

空にはもうすぐ朝日が昇る。

義経はその湖に足を入れ、湖の一番奥にある小さな滝へと向かつ  
た。

ルシフェルもそれに続く。

そして。

声が聞こえて来た。

「待つっていたよ、旅人よ。」

あの長老の皺がれた声と重なつていたよく澄んだ女性の声だった。

「・・・・・」

水しぶきを浴びながら、義経はその滝の奥へと入った。

パシャン・・・・・・

そこには氷壁があつた。

冷たくて、暗い・・・そして、その声の主はそこにいた。

「お前が伝説の女性か？」

義経は尋ねた。

すると、奥の方から、

「そうよ。」

声が戻つて來た。「私はずっと私の民を愛して來たわ。」

「その結果がこれかい？」

ルシフェルが静かに、「獣族の血を得る事によつて命を取り戻し、そして尚、その遊牧の民の中に獣族の血を与え続けて来た。」

義経がそれに続く。

「長老 - - - お前は獣族が間もなくこの地に来ると言つていたけど、本当は民の中の獣族の血が甦る時が来るのを予測していたのだろつ？」

「その通り。」

女性の声は答えた。「あの日、獣族が襲つて来て民のほとんどが深い傷をおつてしまつた・・・・・・・だけど、獣王はこの湖に私を呼び民を助ける約束をしてくれた。」

「それが、獣族との契約か。」

ルシフェルが目を細めて答える。

「ええ。」

彼女が答える。「確かに獣王の血で人々の命は助かつた。そして、それからはずつと私が獣王の血の代わりに私の中に流れる獣王の血を民に与え続けて - - - そして時が流れた。」

「そういう事。」

義経はそう言い、女性の声の方向に近づいて行つた。「獣王がこの民を一族に率いた訳か。」

そこには、一人の女性の - - - ミイラ。

左手首は湖の源泉となる泉に差し伸べたまま。

「・・・・・」

「これが真実よ。」

声はもうその女性のミイラから聞こえてくるのか、洞窟そのものが喋つているのかは判らなくなつっていた。

「・・・・・ もう終わりにしなくちゃね。」

優しく、義経は女性に言つた。「お前の血を欲せずとも民は生きていける。今まで通り月が幾度か廻れば『獣寄せ』の『香』がなくとも獣族として幾月かを過ごす - - - いや、『獣寄せ』の『香』が

なければずっと人として命が吸き取られるまではこの地にいることが出来るだろう。」

「……………そ、うなの?」

女性は言つた。

「そうだよ。」

ルシフェルが答える。冷たい氷壁の様に静かな声で。「もう、君の役目は終わったんだ。」

「そう……………」

女性 - - - ミイラは溜息を付いた。「もう私はこの湖に『命』を捧げなくていいの?」

「そうだよ。」

義経が答える。

「もう誰も失わなくていいのね。」

「そうだよ、長老。」

「だつたら、せめて」

ミイラに若い黒髪の女性の姿が浮かび上がった。「獸王 - - あなたの方で私を葬つて。」

「俺は獸王なんかじゃないけど」

義経は静かに腰の鞘から剣を抜いた。「お前が樂に - - - かつての民の所へ還れるのなら。」

「そうして、義経。」

女性の言葉と同時に。

カシャ・・・ン

銀色に煌めく義経の剣はミイラに向けて振り下ろされていた。

陽ひが昇つた。

この緑の大地に再び朝が来た。

「昨日、獸族を倒してくれたのは、義経とルシフェルなんだね。」

シドが黒い目を輝かせて囁く。

「違うよ。」

義経は首を振り、「シドたちを救つたのは長老だよ。」

「え?」

マリナは目を丸くした。「長老が……。」

「その通り。」

朝の涼やかな風に長い髪を靡かせながら、ルシフェルは、「今、君たちのお父さんが弔いの用意をしている……今度は君たちのお父さん、ロト・キタイが一族の長老となり、シド、君が一族を率いていかなければならぬんだよ。」「…………」

シドは黙りこくれた。まだ、6歳である。

「そんなに急な話しじゃないよ。」

義経は微笑し、「君が一人前のラマ使いになるまで一族の長は、マヤ、君が率いるんだ。姉さんを助けて、一人前のラマ使いになつた時に本当の一族の長となるんだよ、シド。」「…………」

シドは答えた。そしてしつかりと頷き、

「俺、立派な長になる。だから、ラマ使いになる事も忘れないよ

！」

「そうだね。」

義経は答え、大地の果てに聳えるこの民の女性たちが水を汲みに行つていた山に視線を移し、「あの山の頂上に太陽が移つたら、俺たちはこの地を後にするよ。」

「義経……。」

マリナが暗い表情で答えた。「行つてしまふのね。」

「ああ。」

義経は頷き、「俺にはジャパンへ行く夢がある。」

「君たちはもうここで手に入れたんだよ。」

ルシフェルが後を繋ぐ。「ここが君たちの『約束の地』だよ。」

サーッ・・・・・と風が流れた。

そして。

山の上に陽<sup>ひ</sup>が昇る頃、2つの馬<sup>ホース</sup>と2つのラマ<sup>ラマ</sup>が草原を走っていた。

義経たちを見送る、マリナ・キタイとシド・キタだつた。

「ありがとう、義経！」

シドは叫んだ。笑みを顔いつぱいに浮かべ。

義経とルシフェルは軽く振り返っただけだった。

緑の草原は何処までも広がる - - -

ジャパンへ。

ジャパンへ - -

若き青年たちの旅は続く。

5・最終話／約束の地（カナン）後半（後書き）

終わった…………（一￥）。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3952m/>

---

ジャパン

2010年10月10日17時44分発行